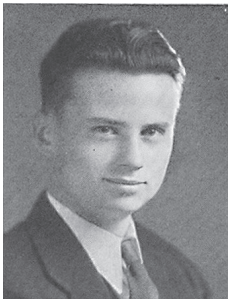
西南学院の宣教師関連資料の収集と検証

～初代学長 W.M.ギャロットを中心に～

K.J.シャフナー

◇和食、着物、そして尺八

9月初旬までアメリカ・ベイラー大学に行って、伝道局の雑誌や婦人会の雑誌などでギャロット先生の記事を集めました。そのときに集めたこの写真は、ギャロット先生が宣教師に任命された24歳のとき、1934年の写真です。



宣教師に任命された当時のギャロット
（Foreign Mission Board, SBC, *Home and Foreign Fields*, Dec. 1934, 19.）

ギャロット先生は、来日後、東京で2年間かけて日本語を勉強しました。彼は勉強家ということが分かりますが、友人に宛てた手紙の中でこのように書きました。「この赤ちゃんは、話すことを学んでいる。私が日本で生まれてから3ヵ月になっている。もう立派な3ヵ月の赤ちゃんの言葉使いができるようになった。毎朝、学校で3時間勉強し、その後できるだけ残りの時間をかけて、日本語の勉強をしている。新しい言葉の学びが、あまりにも楽しいので、私が食べたり、寝たりすることをときどき忘れる者であると皆さんが知っているだろう。日本語を書くためによく使われている漢字は、クロス・ワード・パズルよりおもしろくて、ジグソー・パズルは漢字にかなわない[1]」。学びの喜び、勉強は楽しいということがよく表れています。私の場合は、2週間ほどそういった経験がありましたが、3ヵ月も続かなかったですね。私は、寝ることと食べることを忘れることはなく、勉強していました（笑い）。ギャロット先生は、最初は、ある宣教師の夫婦といっしょに住んでいましたけれども、そのあと、日本人の家に移りました。彼は和食をはじめ日本の生活になじんでいましたし、それに着物も着ていました。もともとフルートを吹いていましたが、尺八も習い始めたんですね。次の写真は、伝道局の雑誌で紹介されたもので、本学の図書館にもあります。

1　1934年12月5日、W.M.ギャロットから友人宛の手紙から。（Southern Baptist Historical Library and Archives＝SBHLA）

尺八を習うギャロット
（Foreign Mission Board, SBC, *Home and Foreign Fields* , Dec. 1936, 15.）

◇明確になった自分の使命

彼が日本語を勉強しているとき、中国から一人の牧師が日本に来て、「ここでの働きを閉鎖して、なぜもっと歓迎されるところに行かないのですか。中国のようなところに行くべきではないですか」と、かなり強く尋ねました。当時、中国で“シャントン・リバイバル”[2]が起こっていたということがあって、もうたくさんの人が助けを求めて教会に集まっていました。ギャロット先生は、それを聞いていて動揺したと言っています。これは彼の使命の確認になったと言えると思いますが、自分のいるべきところは、日本だという思いを強くしたのではないかと思います。「上海事変で自爆した日本兵の事件が示すように、日本人は忠誠心を持っている。そのことが、キリストのために自分の命を失ってもかまわないとなったらどうだろうか。日本から偉大なキリスト教徒が出ているし、他にも出てくるに違いない」と言っています。

彼は、よく賀川豊彦の集会に参加し、よく話し合ったりして賀川から学んでいました。実は、ギャロット先生の結婚のプロポーズもその集会の途中で行ったということです。ドロシー・カーバーという自分の恩師のお嬢さんがいましたけれども、同じ集会に参加していたときに前と後ろに座っていました。それで、「私とマージュ[3]しませんか」というメモを渡してプロポーズしたということです。そういうプロポーズの仕方もあるのかと思いました。実は、彼女の妹さんにプロポーズして断られたこともあったんですけれども。（笑い）それはかなり前で、日本に来る前の話です。そして1938年12月29日にドロシーと結婚しました。彼にとって日本は魅力的なところです。そし

2　1920～30年代に中国の山東省にあるキリスト教会と宣教師の間に起こった信仰復興。
3　「合併して単一組織にする、結合する」という意味だが、ギャロット先生は「結婚」という意味で使った。

て神様が日本人を愛している。だから自分はここにいないといけないと思っていました。「自分のできることはそれほど大きな事はないかもしれないが、たとえ一人の人間は小さい存在であっても、その人は多くの人々をキリストに導くことができるであろう」と言っていました。「命を失うものは、かえってそれを得る」とイエスが語った謎を解くために用いるように祈る、とも言っていました。

◇オックスフォード・グループ運動の影響

東京にいる間に、オックスフォード・グループ運動の影響を受けました。これは、バプテストの宣教師だけではなくて、昨日、アライアンスの宣教師の本を読んでいましたが、そこにもオックスフォード・グループ運動との接触がありました。これは、アメリカ人のフランク・ブッフマンという牧師が、オックスフォード大学に行って学生に信仰の話をしていたら、多くの学生がその話に感動して、罪の告白に導かれ、神様の導きを求めてきたということです。ギャロット先生もそのような集会に参加していて、回りの学生と同じように感動していました。友人への手紙の中で、「自分の霊的な生活が変わった。今までの生活の種類と質において異なる。毎日、自分が変わったと感じている」と書いています。「今までの隠れた暗いところが光に出され、清められ、抑えられない思い、行為、態度が完全に抑えられるようになってきた。自己中心、不正、不純の領域にある具体的な罪に対する疑う余地がない勝利があった。私の人生と思いの中心は間違いなく霊的なことに移っている。」[4]ということです。

その集会に参加してから、神様に何をすればいいかと尋ねたところ、２人の男に赦しを求めなければいけないという思いになったと言っています。そしてそのうちの一人を「軽蔑していた」というのですけれども、別の資料でこれがボールデン先生だということが分かっています。もう一人は「妬んだ」ということで、いっしょに住んでいる結婚した友人でした。その夜、２人に赦しを求めに行きました。そしてほかにも、いろいろな正直ではなかったことを思い出して、お金を返さないといけないとか、学位のことを心配していろいろ不誠実な行いをしたということを友人に手紙を書いています[5]。

4　1935年９月10日、W.M.ギャロットから友人宛の手紙から。(SBHLA)
5　1935年９月10日、W.M.ギャロットから友人宛の手紙から。(SBHLA)

◇オックスフォード・グループ運動の問題点

このオックスフォード・グループ運動がどういうものだったか、１つの論文[6]から４つの問題点が述べられていますので紹介します。

まず第１に、人の前で個人の罪を告白する「シェーリング」。変革された人生に関する公の証や、よく早朝に持たれる「クワイエット・タイム」で神の指導を静かに求める「導き」。これらは、何かする前に神様の導きを求めるということで、そして自分の弱さを人の前で見せるということです。第２点は、教義があまりないということ。何を信じているかはっきりしないという、これも１つの問題です。第３に、その運動はエリート主義だったということ。ほとんどの信奉者はお金持ちで教育レベルが高かったと言われていました。そして４番目の問題は、ファシズム同様に権威主義的な運動であったという点です。ギャロット先生の恩師のカーバーがそれを聞いて心配していましたが、伝道局も宣教師たちがこれに関わっていることをかなり心配していて、「禁止すべきではないか」という話も出ていました。ちょうどそのとき、ドロシー・カーバーが日本に来ていました。彼女は、父親が心配しているということも分かっていたし、伝道局のマッドリー総主事も心配しているということで彼女は手紙を書いています。「私の見るところでは、彼らは単により完全に自分たちを神に委ね、キリストと今まで経験したもっと親しい関係を持つようになった。それで彼らは導こうとする聖霊の声にもっと耳を傾けることができるようになった。…父はオックスフォード・グループ運動の“罪の告白”という方針が極端な方向に導くことを心配していた。…この男たちにとって昨年の６月の告白はそれが大々的に行われて、これからも神に赦されている状態を保つために自分たちを神に委ねたと思う。心配することはない。この人たちは霊的に成長しているだけ。彼らは極端にならない」[7]と安心するような手紙を伝道局と父親に書きました。

◇有意義な抑留生活

日本語の勉強を終え、ギャロット先生は福岡で教えていたのですが、神学校の移転に伴い、1940年から東京に住んでいました。戦争が始まる前に妻のドロシーと次女の

6　D. W. Bebbington, “The Oxford Group Movement Between the Wars” in *Voluntary Religion*, Worcester, UK : Basil Blackwell, 1986, 495～507.

7　1935年９月30日ドロシー・カーバーから南部バプテスト外国伝道局チャールズ・マッドリー総主事宛の手紙から。（SBHLA）

アリスを帰国させました。一人残った彼は、田園調布のカトリックの女子学校で抑留されることになります。そこには彼のほかに12人のアメリカ人やベルギー人、ロシア人などいろいろな国の人たちといっしょでしたが、彼が唯一妻ドロシーに送ることができたメッセージが、“Safe. Well. Profitably interned.”[8]ということでした。古澤先生が、『西南学院史紀要』第6号で「安全。元気。無事に抑留された」と訳しておられます。“Profitably”と表現しているのは、彼はそこにいる間に「本当に有意義なときだ」と感じたのだと思います。そして彼はロシア語を学び始めたように、そこに抑留された人たちからいろいろな学びもありました。講演会も開いたりしていました。そして、最初は許されませんでしたが、その後、ギャロット先生のピアノを抑留所まで持ってきてくれました。さらに彼のフルートやレコード・プレイヤーも持ってきてくれたので、抑留所でコンサートを開いたりしていました。抑留された人たちの中にDJをやっていた人が計画を立て、みんなでレコードを出し合って、コンサートを開いたりしていました。また、新聞を発行するなど、いろんなことをやっていたので、自分にとって大事な成長のときであると語っていました。

ギャロット先生はハワイで働いていたときにラジオの番組をやっていましたけれども、その番組のタイトルは“Life Worth Living”―「生きがいのある人生」というタイトルで、いろいろな人の人生を紹介する番組でした。自分の人生は生きがいがないのではないかと思われている人もいるかもしれませんが、実はそうではないと言って、彼は東京での抑留の経験を話しました[9]。彼は、アメリカ政府から「もう帰国しないと危険だ」と警告を受けたので、自分の意思で抑留所に入りました。帰国船も用意されていて、それには妻子が乗って帰国しましたが、自分は残ることを選んだのです。自分の家族や友人、仕事から隔離されていることは大変だけれども、自分は不平・不満は言えない、と言っています。「幸福は、外に起こっていることよりも、自分の中に起こっていること次第だと分かるようになった。私にとって、抑留所での生活は、幸福に満ちたときだった。人生の中で最高の経験の一つである。その最も重要な理由は、そこは神が望んでいた場所であったからだ。戦争になる前にアメリカ政府は帰国するようにと警告を送り続けて、妻と子どもを帰国させて、私が日本に残った」ということです。自分の選択よりも、神様がそれを選び、神様も彼がそこにいることを望んでおられると思っていました。神様が自分とともにいるということを確信していたし、自分にとってこういうところでも天国だと語っていました。

8　Dorothy Garrott, “Oral History”（Tape : SBHLA）

9　ギャロットが抑留所生活について語ったのは、1947年7月26日の同番組だった。

◇涙を流すしかなかった講話

1939年にアメリカに帰国したギャロット先生は、ノースキャロライナ州にあるリッジクレスト山荘で ― 日本バプテスト連盟の天城山荘のようなものですけれども ―、伝道局のミッションウィークの講話を依頼されました。中国人の牧師の後に話すことになっていましたが、その牧師が戦争における悲惨さ、日本の残酷さをいろいろ話し、献金を呼びかけました。その後話すことになっていた自分は何も言えなかった、話そうとしてももう涙しか出なかったという逸話があります。彼が日本を愛し、イエスが日本を愛しているから日本人が中国で行っていることを知るのは悲痛なものだったでしょう。

そして1942年にも話を頼まれていて、ちょうど戦争が激しかった頃でした。彼のメッセージは、「敵を愛しなさい！敵を愛しなさい！敵を愛しなさい！敵を愛すべき理由は愛する価値がある人、良い人、憎めない人であるからではなく、神が敵を愛しておられるからです。」というキリストからの直接のメッセージでした。この話を聞いていた何人かの人は宣教師として日本に来ました。コープランド先生[10]もその一人です。

その後、戦争が終わって、1947年に日本に戻ってきて、1949年に新制になった西南学院大学の学長に選ばれたのです。その年の友人への手紙[11]の中で、「学長の最初の年が終わった。みんなが少しずつ自分のことを理解してくれるようになっていた。学校は認可を受けて学究的にも霊的にも安定している」と語っていました。よく言われたのは、「西南学院は、日本中で最もキリスト教的大学である」ということでした。彼は、東京でいろいろなところに行って、できるだけクリスチャンの教授たちを招聘しようとしていました。東京の文部省に行くたびに、誘おうとしていました。当時は人事権が学長にあったということがありますが、「もっとキリスト教的になる余地がある。まだまだ道のりが遠い」と語っていました。

大学旧１号館起工式（1951年５月）

10　第６代及び第12代院長、第２代学長を歴任した。
11　1949年クリスマス、W.M.ギャロットから友人宛の手紙から。（SBHLA）

そして、1952年にギャロット先生は日本からアメリカに戻ってきました。「戦争中４年間、枯渇と破壊の４年間。その後５年半アメリカの下で再建。誘導の紐が解かれて、日本が独立国家としてもう一度出発しようとしています」[12]。すでに日本には希望があると言っていました。実は、この資料としては講演のメモしかなかったんですが、タイプライターで打った原稿に、後から書き加えたのは「神に頼る」という文言でした。日本に神の存在が必要だということを感じたのでした。

◇最後の手紙

それから１つ私が驚いたのは、1967年には彼の健康状態で、心臓が問題となっていたことです。このときは、西南女学院の院長を務めていた頃でしたけれども、京都バプテスト病院の宣教師である医師に宛てている手紙の中で、「家からオフィスまでという短い距離なのに以前のペースとは違い、後ろから来た職員に追い越されているということです。立ち止まって深呼吸をすれば何とかなりますけれども、57歳では普通でしょうか。何か提案があるなら教えてください」という内容でした。京都にいた医師に少しでも早く相談したいと訴えるほど相当悪い病状でした。このときから心臓の治療を始めたのです。

終わりに、「最後の手紙」を紹介します。彼が一人でノースカロライナの病院に行ったときに家族に宛てた手紙でした。「これを見ることはないと思うが、万が一他に言える機会がない場合、こうしてあなたたちに私が一人一人をとても愛していることを伝えたくて、神様があなたたちを豊かに祝福しくださるように祈っている[13]」。そして医師が「手術は危険がある。やめてはどうですか」と提案していたのですが、彼は、「手術をやめていたら何もできなくなってしまう。日本にも戻れない」ということで、手術を受けるしかないと言っていました。ドロシーとアリスはその日、別の町に行っていて、「あなたたちが戻ったときにもし私がいなかったら、先に天国に行っているよ。あなたたちを神様にゆだねています」ということでした。手紙の最後でドロシーに書いていますが、「火葬して西南女学院の墓地に埋葬してください。そして自由に再婚してください。私は妬みません。」などと彼女に対する思いやりのあふれる言葉を語っていました。

12　1952年８月４日、「アジアにおける前進」、リッジクレスト山荘での外国伝道週間での講演

13　1974年６月19日、ノースカロライナ州ウィンストン・セーレム市の病院でギャロットが家族へ宛てて書いた手紙

彼の熱心さ、人を大事にする姿勢と西南に対する愛、日本に対する愛がここで見えてきたということを紹介したいと思いました。アメリカで日系人の収容所で働いたことや日本人に同情していたということもありましたが、今回の発表では省かせていただきました。

〈以下は発表後の質疑応答〉

Q．お話にあった1939年のリッジクレスト山荘の逸話で、ギャロット先生がアメリカに帰ったときに、日本の報告をするように頼まれたのですが、そのときにひとことも言えず、ただ立ちつくして沈黙するだけだったと聞いています。またその会の司会はランキン師だったそうですね。今日、はじめてギャロット先生の前に講話をした人がいて、中国の悲惨な状況を訴えたということを聞きましたが、その方は中国人だったのでしょうか。それと日本とアメリカで戦争をしていて、その間で板ばさみになって何も言えなかったということではなく、中国の悲惨な状況を聞いて何も言えなかったということでしょうか。

A．ギャロット先生の前に話をした牧師は中国人で、アメリカで勉強していたのですが、中国で教会が破壊されたり、宣教師が抑留されたり、食糧がないというようなことを訴えました。伝道局の雑誌を見るとかなり中国のことが取り上げられています。そしてこのようにつらい目にあっている中国への献金を呼びかけたのです。そんな話を聞いて、ギャロット先生は何も言えなかったということです。どうして泣くだけだったのかと聞かれたときにランキン総主事は、「彼は日本を愛している。中国で起こっていることは理解していて何も弁護することができません。自分が知っている日本人はそんなことを望んでいるわけではない」と答えました。彼が何も言えなかったというのは、中国の悲惨な状況を聞いたこともあったかもしれません。その気持ちを伝えようとしたが、ぜんぜん言葉にならなかったということでした。彼にはアメリカの雑誌などでいろいろな批判がありましたが、「彼は日本人に同情し過ぎている」ということが問題視されていました。彼が日系人のキャンプで働くようになったときに、「なぜそんなところで働くのか」と非難を受けました。彼は懸命に日本に対する別の見方を紹介しようとしていて、「敵であっても愛すべきものである」ということを強調していました。

Q．上海事変の肉弾三勇士のことで伺います。ギャロット先生は肉弾三勇士を評価していたというようなお話でしたが、当時の知識や情報はどのようなものだったのでしょうか。

A．ドロシーの兄が中国の宣教師だったので、いろんな情報が入ってきていたし、アメリカでも新聞に載っていたと思いますが、残酷だという見方もあるでしょう。ギャロット先生は、違う眼で見て、日本人はこのぐらいの覚悟をする傾向があるので、対象が違っていたら、忠実性を評価できるという違った見方をしたのだと思います。彼は、平和主義者でした。交換船に乗るときに、「あなたは国のために戦うか」と聞かれ、「私は、戦えません。国のためでも、何のためでも戦えない」と答えています。ギャロット先生は、調べれば調べるほどおもしろい方だなと思います。

この原稿は、2014年９月18日に行われた百年史研究会の発表を書き起こしたものである。